

Libro de Alexandre (VI)

Translated by OTA Tsuyomasa

Abstract

The Libro de Alexandre is a great epic poem that consists of 10,700 lines and was supposedly written in the first third of the thirteenth century. This poem is not an ordinary biography of Alexander the Great, because the story is interrupted by many diverse episodes such as that of the Trojan war which took place about 1200 years B.C. according to historians, and that of the Old Testament. Alexander the Great is a personage of the fourth century B.C. and this poem is written in the thirteenth century A.D. So, in this work by an unknown author, perhaps a cleric, a mixture of ages is seen everywhere and that is the most remarkable characteristic of this epic poem.

This work is written in the erudite form of cuaderna vía (four-fold way), the style of which has been called mester de clerecía (scholars' art) as compared with mester de juglaría (minstrels' art).

This translation covers from strophe 1002 to 1186.

アレクサンダーの書 VI

太田 強正 訳

アレクサンダーの書は 13 世紀の最初の約 30 年の間に書かれたと推測される 10700 行からなる大叙事詩である。

これは 33 歳で早世したアレクサンダー大王の伝記であるが、普通の伝記とは異なり、大王が活躍した紀元前 4 世紀、トロヤ戦争が起こったと言われる紀元前約 1200 年、そしてこの叙事詩が書かれた紀元後 13 世紀の話が混然として描かれている。

作者は無名の聖職者であろうと言われているが、Gautier de Chatillon の Alexandreis を底本として、その他の伝記、伝承を基にこの叙事詩を書いたようである。

作品はメステル・デ・クレレシア (mester de clerecía) と呼ばれるもので、中世スペインの主に聖職者による教養階級の文学の流派のものである。これは文字の読み書きのできない吟遊詩人 (juglares) によるメステル・デ・フグラリーア (mester de juglaria) と対をなすものである。

形式はクアデルナ・ビーア (cuaderna vía) と呼ばれる 1 行 14 音節同音韻 4 行詩である。

今回は第 1002 連から第 1186 連までを掲載する。

訳は言葉が違うので韻を踏ませることはできなかったが各行ごとに付けた。そのため日本語として通るように原文にない接続詞などを補わなければならぬ箇所があった。

人名・地名などの固有名詞は原則、原文に従いスペイン語読みとし、日本で普通用いられているものについてはそれに従った。

翻訳に当たっては現代スペイン語訳の他、英訳を参照した。また部分訳ではあるが日本語訳も参考にした。

1002 すでに両軍は移動して互いに近づいていました

弩兵は矢を放ち

騎兵は槍をかまえ

そして馬は耳を立てていました

1003 攻撃が非常に入り乱れていたので

ラッパはその音で聞こえませんでした

矢が宙を飛び交い

非常に密集して飛んでいたので、太陽から光を奪っていました

1004 石と投げ矢が大きな雲のように空を覆っていました

あたかもミツバチの群れが合わさったようでした

攻撃が非常に強硬で激しかったので

角笛の音がかき消されていました

1005 アレクサンダーは落ち着いて胸に手を当てて

最初に馬に拍車をかけ、軍旗を下ろしました

稲妻より怒り、獅子より勇敢に

バビロンの王のいるところに攻撃を仕掛けました

- 1006 前線にいる全軍を引き分け
誰も彼の前にはあえて出ようとはしませんでした
ダリウスを護っていた諸王を攻撃し
彼らの中で彼を恐れない者はほとんどいませんでした
- 1007 アレクサンダーはどうにかしてダリウスに近づこうとしました
というのは自分の槍を他の者に最初に使いたくなかったからです
他の者たちを無視し、見ようともしませんでした
勝利はすべてダリウスのところにあったからです
- 1008 アレクサンダーがほとんど敵軍の中央に至ると
アレタと言う名の一人の騎士がいて、
シリアの君主で、盾を構えており
アレクサンダーに手酷い一撃を加えました
- 1009 アレクサンダー王は決然として、全然動じず
アレタに向き直り、今度は彼を襲い
心臓の真ん中を剣で刺しました
アレタは道の真ん中で死に、冷たくなりました
- 1010 ギリシャ人たちは叫び声をあげ、王に満足しました
自分たちに非常に良い初戦を与えてくれたと思いました
彼らは勝利を確信しました
あたかもバビロニアを手に入れたかのように

- 1011 アレタの臣下たちは、カルデア人の一団ですが
君主の復讐をするために襲って来ました
しかしそうにクリトゥスとトロメウスが受けて立つ用意を整え
神の怒りによって彼らを逐電させました
- 1012 この二人は敵陣の中を歩いていました
飢えた獅子のようでした
歯をむき出し、恐ろしいうなり声をあげていました
人々には彼らが何で来たのか良く分かっていました
- 1013 そこでトロメオはドロンタの首を切り落とし
クリトゥスは非常に傑出した君主であるアルドフィルスの首を切
り落としました
しかしこれは他の事に比べるとほとんど何の価値もない事でした
彼らはペルシャ人たちに対して非常な損害と屈辱を与えました
- 1014 アルドフィロとクリトゥスはお互いに激しく攻撃し合ったので
馬もろとも死んだように倒れました
意識を取り戻したのはクリトゥスが先でした
そこでアンドフィロの戦功はすべて消滅しました
- 1015 ダリウス王が考えていたことを一敵を包囲すること—
うまく成し遂げることができませんでした
というのはギリシャ人たちは後退させる術をよく知っていたので
ペルシャ人たちは気づく時間さえなかったのですから

- 1016 ペルシャ人たちは最初の攻撃の後、非常に混乱していたので
前衛を持ちこたえることができませんでした
代わる代わる来る運を変えるために
敵の左翼を攻撃に出ました
- 1017 ダリウスの臣下の一人、非常な美貌の持ち主ですが
幼少期から決然としていて、勇敢で
—マセオスと言う名で、非常な世襲財産を持っていました—
その彼がギリシャ人たちに対して情け容赦なく切り込んで行きました
- 1018 そこにヨロス（注79）を殺すことになる王子がいました
彼は、もしあなたたちが聞いたことがあるなら、貴重な騎士でした
しかしすぐにフィロタスが復讐しに行きました
もし追いつくことができたら、厳しい裁きを下したでしょう
- 1019 マセオスは遠ざかって行き、フィロタスは彼を捉えることはできませんでした
フィロタスはオコ（注79）と対決し、彼を殺しました
そのことはマセオスが逃げるのを助けました
しそうでなければ、マセオスも同じ運命をたどっていたでしょう

- 1020 ヒルカニア（注 80）の騎士たちがフィロタスを取り囲みました
彼らは勇敢で俊足でした
疑いなく自分たちの手で彼を捉えられると思いました
しかしうまく行きませんでした、かれらはそんなに頑健ではなか
ったのです
- 1021 彼らは彼のことで非常に苦悩し、困っていました
無理やり彼に報いを受けさせようと思いました
彼らは四方から攻められ
皆大きな不運を背負っていたのです
- 1022 フィロタスはひどい日を迎えました
敵は大勢で、彼は疲れていたからです
しかし彼の父パルメニオが助けに来ました
クラテルスとアンティゴヌスも、彼の臣下のセヌスと共に
- 1023 セヌスは槍で深傷を負わせてミダスを殺し
アンティゴヌスは剣で致命傷を負わせフェアクス（注 79）を殺
しました
クラテルスはアンフィロコ（注 79）を棍棒でひどく殴りつけた
ので
脳みそと血が固まって飛び出しました

- 1024 勇敢なパルメニオは—困難な時代に生まれたのですが—
怒れる獅子のように戦線を歩き回って
多くの首を野に晒しました
彼が捕らえることができは者には満足していませんでした
- 1025 彼は恐ろしい騎士イアネス（注 79）を殺し
ディムス（注 79）というも一人の騎士も道連れにしました
ディムスは傍から、イアネスは正面から襲って来ました
しかし二人とも同じ道をたどることになりました
- 1026 彼らを皆殺しても怒りは収まりまらず
賢人アギロン（注 79）も殺しました
そしてエロン（注 79）とアラビア出身の五番目の人間も
一しかし結局、それにもかかわらず、戦果はあがりませんでした—
- 1027 十二人組の一人エウメニデスが
義憤に駆られ敵の兵士の顎を碎いてまわり
死人の頭で丘を埋め尽くしました
—これ以上のやり手はギリシャからは輩出されませんでした—
- 1028 右翼を指揮していたニカノルは
右に左に大きな損害を与えていました
多くの兵士の首を落としました
彼らを奇妙な方法で倒して行きました

- 1029 敵は彼の盾に激しく攻撃を加えてきました
一屋根を打つあられもこれほど執拗ではないでしょう—
しかしその勇者は断固としていて慎重でした
戦いは激しいものでしたが、彼を動かすことはできませんでした
- 1030 勇敢な騎士エクリムス王子（注 79）が
彼は美貌の持ち主で、高貴の出で、卓越した計略家ですが
ニカノルを討つために怒りに燃えてやって来ました
しかし見事に撃退されました
- 1031 攻撃の激しさにニカノルは反撃に出て
槍で左目を激しく突きました
その一撃は残酷で、容赦のないものだったので
エクリムスは両目を失いました 一神様、何とひどい仕打ちでし
ょう—
- 1032 ニネベを治めていたダリウスの側の一人の王が
一名前を呼びたい者はネグサル（注 79）と呼んでいました—
気の荒い牝クマよりも怒り狂って
行く所皆殺していました
- 1033 すべての所を攻撃し、腕をうまく振り回していました
彼の手の一撃はほとんど棍棒に等しいものでした
彼を捕らえようとする者を鎧は護ってくれませんでした
彼はダリウスが戦場からうまく逃れてほしいと思ったのでしょう

- 1034 ネグサルは三人の貴族を段々とあざやかに殺していきました
エリン（注79）は胸を、ドリト（注79）は肩を打ち
エルモヘネス（注79）は剣で首筋を切り裂きました
しかし最後にフィロタスが邪魔しました
- 1035 勇者フィロタスはこのありさまを見て
勇ましさ故に耐えることができませんでした
《主よ—とフィロタスは言いました—私をお助けください、栄え
ある王である父よ
この怒れる龍を倒すことができますように》
- 1036 フィロタスは疲れていましたが、ネグサルに向かって
剣を握り、盾を構えて馬で突進して行きました
頭をかちかち割ろうとしましたが、相手はしっかり武装していて
考えていたことを達成できませんでした
- 1037 フィロタスはネグサルをしっかり捉えることができず、斜めから
攻め
左腕を攻撃しました
ネグサルが攻撃を払いのけるためそれを上げると
フィロタスはその不幸な男の腕を中程で切り落としました
- 1038 ネグサルは苦悩し、死んだほうがまだと思ったことでしょう
すでに半身を丸ごと失ったのですから
しかしフィロタスにひどい仕打ちをしていたことでしょう
もし彼に大打撃を与えたアミタス（注81）がいなければ

1039 ネグサルは右手で恐ろしい鉛の棍棒を持ち上げ
—動物にとってもそれは過重だったでしょう—
フィロタスの頭に大打撃を加えようと思いました
しかしその前にアミタスが攻撃をかわしました

1040 ネグサルが腕を伸ばす前に
勇敢なフィロタスは急いで
もう一方の肘に剣で一撃を加えました
ネグサルは残っていた右腕も失いました

1041 ネグサルが両腕の残った部分で自分の胸を叩くと
そこから下水のように血が流れ出ました
血がヒゲと額と髪を染めました
鞍頭にしがみつこうとしましたができませんでした

1042 命知らずの所業でしたが
彼の堅固な心は消沈していませんでした
この悪魔は陣営を歩き回りました、言いながら
《奴らを攻撃せよ、騎士たちよ、お前たちは勝ったのだから》

1043 他に損害を与えることを見つけることができなくなると
善戦していたギリシャの王子の
前に立ちふさがり躊かせました
二人は間もなくそこで息絶えることになりました

1044 戦闘は優に半日続き

多くの兵士が死に、血を流して横たわっていました

川は血でほとんど浅瀬がなくなり

疲労していないほど頑健な者はいませんでした

1045 命の糸を断ち切る運命の女神（注 82）は

数え続けることができず、目安なく断ち切っていました

疲労で記憶を失っていたのです

女神は1日でこんなに忙しいことはありませんでした

1046 運命を操る他の二人の女神（注 83）は

疲労からしゃがみこんでいました

三人とも自分の被害者たちに誓いをたてました

人々は今までそのような合わさった力を見たことがありませんでした

した

1047 皆、父も息子も、甥も兄弟も

皆勇敢に戦う強い心を持っていました

ギリシャの者たちが死に、イラン人のさらに多くが死にました

谷はすべて埋め尽くされました

1048 皆そこでは立派でした、アレクサンダーはさらに

一他の事におけるように、事ここにおいても主人らしく見えました

激しい急襲で大前進を果たしたので

すでにもう一人の皇帝に近づいていました

1049 アレクサンダーはもっともな不満をダリウスにぶつけることがで
きたでしょう

自分のまったくの正しさを実行に移せたでしょう
しかし彼を待ち伏せていたダリウスの弟が
大きな妨げになりましたが、彼は何も得るところがありませんで
した

1050 ダリウスはこの間、手をこまねいていたわけではありませんでした
た

彼以上勇敢に戦っている者は戦場にいませんでした
彼は人の命を絶たないような攻撃はしませんでした
その上、攻撃は決して過ちませんでした

1051 しかし書物が伝え、真実が証明するように
すべては最後に分かるものです、名譽も損得も
ダリウスには自分のすべての戦功は何の価値もありませんでした
というのは神が命令通り、事を運んだからです

1052 そこにエジプト出身の貴族がいて
書物にあるすべての事を知っていました
彼は前の晩星占いで見ました
ギリシャの騎士が彼を殺すことになると

1053 よく見通す事ができたので、彼には分かっていました

その日戦いで死ぬことになると

それでアレクサンダー王を見つけたいと思いました

できるなら彼の手にかかるて死にたかったからです

1054 彼はソレアスという名で、とても学がありました

一かつて教養 7 科目（注 84）の学校を持ってました—

騎士道においても優秀でした、証明済です

これら二つの資質で彼は二倍の価値がありました

1055 ソレアスは王のいる所に目をとめ

家畜の群れの中にいる狼がするようにしました

神と法にかけて願いました

王に対して自分の槍を使いたいと

1056 王は感服し、ひどく驚いて

彼に言いました：《お前は気が狂っているか悪魔が憑いている

私の值打ちはここですべて損なわれるだろう

もし私が敗者に対して、残忍なことをしたら

1057 しかし頼むがお前の法にかけて私に言ってくれ

出身はどこなのか、どんな血筋の者なのかを

なぜならお前は分別がないか、わたしを騙そうとしているからだ

あるいは何かの方法で新しい知識を持っているからだ》

1058 ソレアスは彼に答えました：《あなたに本当のことを言おう

私はエジプトで生まれこの歳になりました

両親はそこの出で、わたしは莫大な財産を受け継ぎ

そこで十分な知識を身につけました

1059 私は聖職者の学科のことはすべてよく知っています

天文学もすべて誰よりもよく知っています

星々が聖なる調和の内にどのように神を贊美するのかも

書物の理解についてだけは話したくありません

1060 すべての知識が私というこの箱の中に入っています

そこですべてが結びきました

その上これらすべてによって騎士道についても

私はこれ以上の者を知りません

1061 私は私の知恵で昨日知りました

今日この日私の魂をが抜かれるかもしれないことを

本当に良く知っておいてください、それ故私が望んでいることを

あなたの手にかかるて死にたいと、そしてそのことをあなたに感

謝したいと》

1062 《それは一とアレクサンダー王は言いました一良くないことだろ

う

知識からこのような貴重な住処を奪うことは

神々は望まないだろう、私のこの剣が

このような神聖な頭で血に染まることを

1063 ソレアスが王を説得できないと分かると
悪態をつき始めました
彼に決して王になるべきではなかった言いました
なぜなら彼は私生児で下劣な行為の結果なのだから

1064 王をもっと怒らせるために
王はたちの悪い売女の息子だと王に言いました
その女は山で密かに王の父を殺したと
そしてそんな悪行をしてかした者はいないと

1065 王はこれらすべてに対して答えようとしました
ソレアスは死にたいのだと分かっていたからです
王は馬の手綱をとって立ち去り
ダリウスの軍の前衛を攻撃し始めました

1066 狂気に憑かれたソレアスは執拗さを持ち続け
アレクサンダーに全力で向かって行きました
そして鎧がタイツと繋がるところに
非常な傷を負わせたので、アレクサンダーは身をよじりました

1067 アレクサンダー王はソレアスの攻撃で負傷しました
非常に深い傷で動けなくなりました
しかしソレアスは更なる攻撃はしませんでした、そこまで自制していました
しかし他の者が彼を救い出し、すぐにソレアスを殺しました

- 1068 メレアゲル（注 85）がすばやく、ソレアスの脇腹をつくと
その悪魔つきの狂人はすぐ倒れました
直ちに切り刻まれ、槍に吊るされ高く上げられました
王を傷つける者がより軽い処罰を受けることのないように
- 1069 すでにダリウス一人に攻撃が向いていました
彼はあんなに多くの良い戦士たちに見放されていました
非常な苦境に立たされていました、強敵がいたからです
彼は戦場で不幸を目の当たりにしていました
- 1070 ダリウスはある者は死に、他の者は逃げたのを見ました
最も信頼していた者たちが皆倒れました
敵の中で自分がほとんど一人なのを見ました
《不幸な者たちよーと彼は言いましたー、我々は悪い時に生まれ
たのだ》
- 1071 ダリウスはどうしたらしいのか分かりませんでした、かくも途方
に暮れていたのです
死ぬも逃げるもすべてが彼にはつらいことでした
彼の王国が失われ、民がバラバラになるのが分かっていました
《不幸なことだーと彼は言いましたー、私は悪い時に生まれた》
- 1072 良き皇帝は迷っていました
死ぬのは良くないが、逃げるのもっと悪い
二つの悪のどちらがより良いのか考えていました
しかしどちらも彼に悪い結果をもたらすことになるろうと

1073 ダリウスが何をして何をすまいかを考えている間
十二人の内の一人で、完璧な騎士ペルディカスが
舵のように大きい槍を放つと
ダリウスの襟ぐりの近くのうなじに命中しました

1074 ダリウスは倒れ、持ち堪えることができず
戦場を離れ、逃げ始め
うまく身を隠すことができるよう馬から下りました
ギリシャ人たちに気付かれないようにするためです

1075 アウソンという彼の臣下の一人が
良い時に運をつかみました
自分の馬を彼に与えたのです 一神からたっぷり褒美がもらえますように—
彼はユウフラテスを渡り、バビロンに向かいました

1076 残った者たちが知ると
ダリウスが戦場を離れたことを
腕を落とし逃げ出しました
こうして不承不承ギリシャ人たちに勝利の栄誉を与えたのです

1077 ペルシャ人たちは逃げて助かろうとしました
背後のギリシャ人たちは追跡の仕方をよく知っていました
名誉の戦死を遂げた者たちは
生きるために無駄な死に方をしたことになりました

1078 ペルシャ人たちは皆最悪のことを考えていました
恐怖で心が変形して行きました
アレクサンダーはそれを感じ取っていましたが、彼らを
さらに追い詰めて行きました
彼らは盾を背中に背負って行きました（注 86）

1079 アレクサンダーが勝利し
ダリウスがその軍と共に追い詰められると
アレクサンダーは苦労した自分の兵士たちに武器を置き
神が彼らに与えた戦利品を取るように命じました

1080 彼らは望んだことがないようなものすべてを好き勝手に手にしました
—彼らは神に願ったよりも多くの財を見つけたのです—
長持や包み、あらん限りの袋
このようにこれ以上できないほど詰め込みました

1081 戦場での略奪がすべて終わると
ギリシャ人たちは怯えている夫人たちに向かって行き
すぐに衣服がすべて剥ぎ取られました
そして持っていた宝石もすべて

- 1082 夫人たちが宝石を奪われると
 更なる屈辱を受けました、全員犯されたのです
 既婚者も未婚者も皆そうされました
 しかしそれは望んでのことではありませんでした、そのことに彼女たちには罪はありません
- 1083 ダリウスの同伴者 一妻と母親
 二人の娘と一人の息子一 はアレクサンダーが保護しました
 アレクサンダーが父親だったとしても、彼女たちをこれ以上厚遇はしないでしょう
 ダリウスに忠実だった仲間に幸あらんことを
- 1084 アレクサンダーは確かな情報によって知っていました
 ダリウスが宝物を行路から他に移したことを
 一それはダマスカスにあったのです、本当のことでしたー
 類稀な騎士パリメニオがそれを求めて出発しました
- 1085 ダマスカスの君主は非常に邪悪なことを考えました
 アレクサンダーと^{よしみ}誼を結ぶことを考えたのです
 裏切りによって町をカラにしました
 しかし彼はその背信によって何も手に入れませんでした
- 1086 人々が欺されたことを知ると
 (退避を)責められるよりも死ぬことを望みました
 彼らを立ち退かせたその総督を殺し
 パルメニオと戦い、敗れました

- 1087 ダリウスは裏切り者の死をもっと喜びました
自身の敗北や不名誉を悔やむりも
これはもう一つの苦悩に対して大きな喜びとなりました
彼は創造主に喜んで感謝を捧げました
- 1088 ダリウスは言いました：《おー、神よ、あなたが祝福され、褒め
称えられんことを
私はまだあなたから見放されたとは思っていません
主よ、私はこのことだけであなたに満足しています
あなたがこんなに見事に私のために裏切り者に復讐してくださったのですから
- 1089 この後もまださらに大きなお恵みを期待しています
私にはあなたがお恵みを下さるだろうという確かな印が見えます
あなたが私の偽りの戦士に復讐してくださって以来
私は何が起ころうとも、一銭たりとも費やすことはないでしょう》
- 1090 アレクサンダーが戦利品を分け与え
七日間の祈禱が終わり、弔鐘が止むと
彼は患難に慣れた軍を移動させるように命じました
シドンを包囲する準備ができるように

- 1091 ギリシャ人たちは激高していたので、死を恐れず
競って城壁に登ろうとしました
敵はあまり抵抗できなかつたので
非常に早く、力でその町を征服しました
- 1092 シドンが征服されると、ギリシャ人たちはチロスを包囲に行きました
それは堅固な場所にある非常に富んだ町でした
優に三方を海に囲まれていて
力でそれを征服できた者はいませんでした
- 1093 アレクサンダーは町を譲り渡すかどうか使者を送ると
彼らは否と答えました、凶と思ったからです
アレクサンダーは喜び、戦い取ることにしました
彼らが準備しようとしている間に
- 1094 ティロス人たちは城壁に十分に兵士を配置し、小門を閉じ
急いで用意するよう命じました、矢と投げ矢
槍とマサカリ、剣とナイフ
鎖かたびらと鎧、盾とカブトを
- 1095 彼らは計測してその場所を分割し
頑丈な投石機を塔に据えて
そこに十万台分の食料を運び込みました
神が望めば彼らは十分用意が整つた人々だったでしょう

1096 アレクサンダーがこれを見ると

ティロスの人々は彼に大きな奉仕をしてくれていると言いました
というのはギリシャ人たちはさらに大きな名誉を得ていたからです

力だけで他人のものを手に入れることによって

1097 その町は包囲されました、たちまちでした

そしてすぐに陸と海から攻撃されました

ギリシャ人たちは彼らに矢を放って非常に混乱させることができ
たので

彼らは頭を出すことさえできませんでした

1098 アレクサンダーは彼らに非常に怒っていました

彼らに非常な被害を被っていたからです

送った使者たちを殺したのです

彼らは停戦中に伝言を運んだのです

1099 使者たちは和平を結びに行ったのです

ティロスの人々は奸計を画策しました

自分たちの重大な罪のために目が見えなくなつたのです

彼らは自分たちを救おうとした人々を殺したのです

1100 それでアレクサンダーと彼のすべての臣下たちは

ティロスの人々に対して怒り狂っていました

そこですべての人々は自分のひげに誓いました

皆各々町に火のついた木を投げ込んでやると

- 1101 ギリシャ人たちは海と陸から彼らを攻め
皆怒りで恐れを失って行きました
ティロスの人々、そしてすべてが燃えたって
戦いは町の周囲に広がって行きました
- 1102 ティロスの人々はよく知っていました、もし負ければ
大人も子供も刃にかけられるだろうと
彼らは降伏するより戦って死ぬことを望んだでしょう
すでに彼らは自分たちが間違っていたと悟り始めていました
- 1103 ティロス人は非常に誠実な人たちだったでしょう
もし使者たちを殺したりしなければ
しかしことこれにおいては重大な過ちを犯しました
世が続く限り、彼らは常に責められるでしょう
- 1104 決して裏切り者を評価しないアレクサンダーは
襲撃者たちに彼らを攻めるように命じました
彼は司令官たちに非常に激しく攻撃を迫ったので
彼らの毛という毛は多量の汗を流しました
- 1105 あらゆる方向から投石機による攻撃と
彼らが考案した多様な武器が襲いました
毒矢が飛び
石と投げ矢で大きな雲のようになりました

1106 ギリシャ人たちは投石機で甚大な打撃を与えたので
大部分の塔を倒しました
しかし中にいるティロスの人々は非常に勇敢だったので
町の外にいる敵を寄せ付けませんでした

1107 アレクサンダー王は会議を招集して
言いました：《男たちよ、我々はからかいの対象になっている
我々は我々の日々を小さな城で無駄にしている
我々は他のもっと良い方法を探す必要がある

1108 もし今回このように敵が我々から逃れれば
これを知った人々は皆、我々に何もあたえてくれないだろう
そしてすでにある我々の名声が
たちまち無になり、不名誉となるだろう

1109 しかし私は我々が皆決断することを望む
皆慎重に近づこう
皆十分気を入れて彼らを攻撃しよう
胸壁が土台と同じ高さになるようにしよう

1110 我々皆各々自分の場所から彼らを攻めよう
夜も昼も彼らに休息を与えないようにしよう
生きている者は死者のために戦うことをやめないように
ひどい疲労で彼らは我々に降伏することになるだろう》

- 1111 兵士たちはアレクサンダーのこの言葉に耳を傾け、征圧に出発しました
海と陸から非常な力で
ある者が他の者が倒れるのを見ても
それで前進を止めることはありませんでした
- 1112 身分の高い者も低い者も皆本当に良く戦いました
次々に城壁にはしごをかけて行き
多くの者が頭部に傷を負っていました
王は常に先陣を切っていました
- 1113 いかに多くを語ろうとも、すべてはここに尽きます
ティロスの堅固な城壁はたちまち崩れ落ちました
外にいる者たちがすでに町を占領して
彼らにその失敗を見せつけていました
- 1114 ティロスの財宝はすっかり奪い去られ
子供も大人も剣にかけられました
母親たちは斬首され、息子たちも同じ目に遭いました
そしてその日に生まれた赤子たちもまた
- 1115 皆そのような道をたどり、そのように死んでいきました
幾人かが神殿に逃げ込んだのを除いて
彼らが悪人だったとしたら、そのように悪い最後を遂げたのです
一本本当に私は後悔していません、彼らはそれに全く相応しかったのですから—

- 1116 町がまったく無人にされると
ギリシャ人たちは家々に火を放ち、町は瞬く間に焼かれました
彼らは城壁に向かい、すっかり破壊しました
ティロスの町は真っ平らにされたのです
- 1117 裏切り者どもは常にこういう結末を迎えるべきだったのです
保証人によって逃亡するべきではありませんでした
彼らは友達も護らないし、君主も容赦しないからです
彼らとその手下が悪い結末を迎えますように
- 1118 このようにして素晴らしいティロスは滅びたのでした
それはヘノル（注87）の非常な骨折りで建てられた町でした
しかしそれはキリスト教の時代に再興されました
他の町々の長として
- 1119 良き王イラン（注88）はこのティロスの人で
ソロモンに木材を送った人物でした
非常に壯麗な神殿を建てているときに
俊足の悪魔マルトル（注89）もここに出でました
- 1120 ティロスの近くにありました
ガザという名の豊かな町が
場所といい、出来具合といい、申し分のない
素晴らしい、完璧な町でした

- 1121 ガザはティロスのこともその皇帝のことも憶えていませんでした
ギリシャ人たちを前にして、いかにまずい対応をしたのかも
まずひどく怒り、それから後悔し
ギリシャ人たちから退却することはないだろうと言いました
- 1122 力ずくで町を護ろうとしました
アレクサンダーは喜び、攻めに行きました
両軍大きな兵力でしたが
お互い大いに戦わなければなりませんでした
- 1123 外側にいるギリシャ兵たちが城壁を登ろうとしましたが
内側にいるもう一方の兵士たちは彼らを見事に押し返しました
この時兵士たちはまっしぐらに死に向かっており
アトロプス（注 90）が兵士たちの命の糸をほどんど切ろうとし
ていました
- 1124 この時悪魔に憑かれた一人の男が現れました
巡礼者のようにすっかり姿を変えて
内側にいる兵士たちが彼を送り込んだのだと思います
すんでのところでアレクサンダーを殺すところでした
- 1125 その男は衣の下に剣を隠していました
王に近づき、強烈な一撃を加えようとしました
しかし手の力が抜けて、できませんでした
彼は失敗しました、まだ時が来ていなかったからです

1126 アレクサンダーが襲われて死ぬのを運命は望んでいませんでした
神々によって他の方法が命じられていたのです
すでに毒が出来て用意されていて
臣下たちによって注がれることになったいました

1127 その悪者は捕らえられ、白状しなければなりませんでした
王を殺すためにどうやって来たのかを
王は直ちにその男の右腕を切り落とすよに命じました
ただそれが目的を達せなかつたという理由で

1128 王はガザに対して激怒しました
その町を攻めるのにそれは懸命になりました
兵士たちに無理やりにでも突入してほしかったのです
しかしちょっと止まりました、重傷を負ったからです

1129 敵が王の肩に投げ槍を命中させたのです
そして足にも石を激しく投げつけました
王は少しひるみましたが、ガザの人々には何の役にも立ちません
でした
彼らは敗れ、町は征服されました

1130 ギリシャ人たちはガザに留まりました、非常に疲れていたからです
王は回復し、他の者たちは力を取り戻しました
彼らはまったく戦争に没頭していたので
慣れた仕事に戻って行きました

- 1131 アレクサンダー王と全家臣は
ガザを手に入れると、ユダヤに向かいました
ガリレアの地では人々は非常な恐怖に駆られました
ひどい目に遭うのではないかと思ったからです
- 1132 ギリシャ人たちの王は非常に情け深い男で
人々がいかに創造主の法を守っているか耳にすると
彼らに人を送って平和と慈しみのうちに言わせました
彼らの皇帝として自分を尊重するようにと
- 1133 アレクサンダーはエルサレムに秘書を送りました
ダリウスに収めていた貢ぎ物を彼に納めるようにと
その上、これに逆らう者は
祭日を台無しにしてやると
- 1134 立法の長であるハドゥスは答えました
ダリウスとは取り決めがあり
もし他の者に納めれば、まずい事になるだろう
どうしてもギリシャ人たちは他の事は要求できないと

- 1135 アレクサンダーは怒り兵士たちに馬で出発し
直ちにエルサレムを包囲するように命じました
というのは彼らがそれを変えないとときは
彼が誰に貢ぎ物を納めるべきか示すことになったでしょうから
- 1136 ハドゥスとエルサレムの町全体が
アレクサンダーが来ると知ったとき、ひどく憂慮し
人々はすべての聖者に願いました
神が彼らに憐れみを示してくださるように
- 1137 ハドゥスが眠っているとき、神が幻に現れて言いました
アレクサンダーが来ると判ったら
ミサを挙げるいでたちで迎えに出て（注91）
すべて彼が望むように事を運ぶように
- 1138 翌朝叫び声があがりました
アレクサンダーがギリシャ人たちとやって來たと
そして彼らは怒り、武装して町にやって來ると
すでにすべてのユダヤ人は言っていました：《我々は終りだ》
- 1139 司教は聖なる衣を身にまとい
頭には高価なミトラをかぶり（注91）
額には美しい文字で書かれた羊皮紙が付いていました
それには一面神の名（注92）がしたためてありました

- 1140 司教は全聖職者に用意させ
 立法の書を権威付けのため持って来させました
 人々はアレクサンダーを道に出迎えに行きました
 1日でこれほどの決定をしたことはかつてありませんでした
- 1141 人々は道をバラや花々で覆いました
 それらは美しく良い匂いをさせていました
 子供達は皆枝を携え
 アレクサンダーに感謝し、讃め讃えようとしました（注93）
- 1142 アレクサンダーがそのような高貴な行列をみたとき
 偶然に幻のことを思い出しました
 彼は司教の前に片膝をつき
 地面に跪き、長い祈りを捧げました
- 1143 アレクサンダーは臣下をすべて外に待機させ
 彼は町に入り、祈りのため立ち止まりました
 立法が命じる通り供え物を捧げ
 自分の法と自分のすべての流儀を彼らに確認しました
- 1144 彼らを貢ぎ物とすべての税から解放し
 立法に従うように命じ
 すべての人々に胸を張って生きるように命じました
 彼らと永遠の^{よしみ}好を結んだのですから

1145 王はダニエル書のある予言（注94）を読みました
あるギリシャ人がアジアを王国にするだろうと
王は気に入り、とても喜び
言いました：《私は自分の頭に賭けてそうなるだろう》

1146 臣下たちの間で大騒ぎになりました
王がとんでもない事を企てたと
そして全貴族の不評を買いました
それで彼の宮廷全員がひどく侮辱されたと思いました

1147 勇敢なパルメニオはそれに耐えらず
王のところへそう言いに行きました
王は自分の話を聞きに来るよう皆を呼び集めました
彼らにこの質問に答えたかったからです

1148 《私の父である王フィリポが死んで
裏切り者のパウソナが縛首になったとき
王国は、お前たちが知っているように、弱体化していた
私は若かったので気落ちした

1149 私は部屋で床に伏せっていた
王国の事を考えながら
その大きな苦悩で睡眠が後回しになり
大きな悲しみの中で大きな苦痛に耐えて横になっていた

1150 陰気な夜で、家は薄暗かった
苦惱していたので、汗を流していた
敷き布団は硬い板のようだった
悩みを持った者は常に窮屈な状態で横になるものだから

1151 私がこう考えている時に
稻妻がひかり、風がおこり
泥棒のように窓をこじ開けた
うとうとしていたので、ちょっと驚いた

1152 私は驚いたので頭を上げ
ノロノロして肘をついた
宮殿全体が非常に明るく照らされるのを見た
まるで真昼に太陽が照りつけているように

1153 私の上に着飾った男が現れた
男と呼ぶのは間違いだと思う
私はそれは天から降りてきた天使だったと思う
誰もそのような顔を持っていなかっただろうから

1154 それは全身司教のように見えた
ミトラも靴も衣装も
純粋な絹ですべてできている祭服を着ていて
その祭服は非常に長く足まですっぽり覆っていた

1155 額に四つの文字が描かれていた

意味がはっきりせず不鮮明に書かれていた

わかりにくく私には読めなかった

上質の金が使われていて、神聖な文字のようだった

1156 私がそのような高貴さ、そのような立派な姿を見たとき

その人は何も言わなかつたので、質問した

彼は何なのか、どこから来たのか、どこへ行くのかと

彼は急いで次のように答えた

1157 “アレクサンダー、私がお前に何を言いたいか聞きなさい

ヨーロッパから出て、海外に行きなさい

お前は世界のすべての王国を手にいれることになるだろう

お前に対抗できる者を見つけることは決してできないだろう

1158 私はさらにおまえに良い助言をしてあげよう

私の格好をした人を見たら

深い敬意を払って、最大限の節度を見せなさい

その人はつねにお前の幸運を増していくれるだろう

1159 こう言うと、消えていき

私の視界から去り、見えなくなりました

家はいつものように暗くなりました

芳香で死人も蘇ったかもしれません

- 1160 その同じ姿、そしてその同じ服
 それはその時私がその聖なる人に見たものだが
 私はそれをこの司教に確かに認めた
 だからおまえたちは私が間違っていると思ってはいけない
- 1161 私はこの人を崇めないし、主人とも思わない
 しかしその姿のもと創造主に祈りを捧げる
 その人は 私を皇帝にすると彼に約束してくれた
 そ人は王であり、司教であり、修道院長であり、司祭である
- 1162 友たちよ、お前たちにはよく知ってほしい、あの使者が
 私を確信させるための神からの伝言であったことを
 他の占い師ではなく、彼が私を導いてくれる
 彼が本物であることをお前たちは皆分かるだろう》
- 1163 皆すでにアレクサンダーが正しく行動したことを理解しました
 彼らは王国を得ることを確信し
 すべてがしっかりと計画されているのを見ました
 そしてダリウスが破れても、不思議ではないことも
- 1164 それからアレクサンダーはサマリア（注95）に行き、ただちに
 受け入れられました
 人々は彼に共通の注文を出しました
 自分たちに素晴らしい特権を与えるように
 エルサレムで彼が定めたような

1165 アレクサンダーは彼らの生まれについて尋ねて、確かに知りました

彼らがヘブライ人と呼ばれていることを、というのは本当のことだったからです

王は彼らに言いました：《友たちよ、私はこのような大いなる自由を

ユダヤ人だけに与えた遺産として》

1166 アレクサンダーは手に入れたものをしっかりと保管して
エジプトに怒れる稲妻のように入りました
その王は賢明で、人々は調和していく
彼をただちに受け入れ、その命令に従いました

1167 エジプト、その広大な全土と
名も知らぬ他の多くの土地を征服すると
非常に有能な君主であるアレクサンダー王は
巡礼（注 96）に出たいという欲望に駆られました

1168 籠と杖をとり（注 97）

リビアへ、アモン神の神殿に行こうとしました

そこはジュピターがバッカスに大きな贈り物をした所ですが
そこへ供え物と祈りを捧げるために

1169かつてバッカスがインドを征服したとき

全家臣と共にリビアにやってきました

砂漠を大行進して

全軍が渴きにひどく苦しみました

1170大地は乾いていて、泉はありませんでした

彼らはどうしても水を手に入れることができず

バッカスはジュピターに方法を示してくれるよう頼みました

それによって必要な水を得ることができるような

1171坂道の近くの木の下に現れました

毛ですっかり被われた真っ白なヤギが

そしてそれが平らな地面を右足で搔くと

そこに泉があるかもしれないと彼らは思いました

1172バッカスがそこを掘るように命じると、すぐに水が湧き出ました

一掘ろうとする者たちは大した苦労はしませんでした—

多量の水が出て、砂地を満たしました

皆喜び、美味しい夕食を食べました

1173ジュピターはその泉を聖別し、それを絶えざる泉としました

バッカスの力の印となるようにそのようにしたのです

冬も夏も同じように水が湧き出て

夏は冷たく、他の季節は暖かい水が出てるように

1174 これらすべての美点に加え、もう一つありました
暑い日中は冷たく
非常に冷える夜間は生暖かい水が出ていました
この泉の水を飲んだ者は非常に幸運だったでしょう

1175 泉の近くには非常な神聖さがただよっており
日々多くの病が癒していました
善意の人が何か頼んで
その必要性が聞き入れられなかったことはありませんでした

1176 アレクサンダーはこの場所のことを聞いたことがあります
喜んで見たいと思っていました
そこで供え物をして
その水を喜んでも飲みたいと思っていました

1177 丸々四日間の道のりでした
足の速い動物にとっても大変な距離だったでしょ
それは長いというよりも困難なものでした
その間多くの難所があったからです

1178 そこは決して雪も雨も降らず露も降りない所で
泉も地下貯水槽も川も見当たらず
緑の一切ない所でした
—私にとってはあまり健康的ではないと思います—

- 1179 太陽が照りつけると、すべて砂地なので
人はカマドの中でもこれ以上の激しい苦痛は被らないでしょう
その上砂が動くと
セイレンが歌っている場所でもこれ以上大きな苦痛とはならない
ないでしょう
- 1180 類稀な戦士であるアレクサンダー王は
恐れのためにことを試して見ないままではおかないので
その場所を見に出発しました
しかしその前に大きな苦難を被ることになりました
- 1181 王は道中兵士の多くを失いました
騎兵も歩兵の多くも
砂と渴きが彼らの肺を蝕み
道中彼らはバタバタと倒れていきました
- 1182 四日後、疲労困憊して
ギリシャ人たちは聖地に到着しました
非常に疲れていたので、休息しようと考えました
—私は、彼らは少なくとも十分の一になっていたと思います—
- 1183 彼らは非常に熱心に徹夜の祈りを捧げ
蠟燭と捧げものに大枚を使いました
各々神に願い事をしようと思いました
それは各々心の中で考えたものでした

1184 彼らが各人各様に休息をとると
 すべてがエチオピアに行くための話になりました
 太陽の昇る所（注98）と、人の住んだことのない所を見るため
 に
 しかしその時心配な伝言が届きました

1185 ダリウスが力を盛り返したという伝言でした
 アレクサンダーに戦いを挑む用意ができており
 一帯を探したが
 アレクサンダーはギリシャへ帰ったと報告を受けていました

1186 アレクサンダーは喜び、馬で出撃しようと思いました
 というのは内なる悪魔が死ぬほど戦いたがっていたからです
 エジプトに戻り、ダリウスを探しに出ました
 彼に会い見えるまで

注

- 79) 底本の作者 Gautier の創作による架空の人物
- 80) カスピ海の南東の地域
- 81) アレクサンダーの将軍の一人
- 82) ギリシャ・ローマ神話の運命の三女神のうちの一人
 Atropo、人間の運命の糸を斬ち切る
- 83) 運命の糸を紡ぎだす Cloto とその長さを定める Láquesis
- 84) ここでも時代が飛んでいるが、中世の大学の科目で文法、修辞、論理、算術、幾何学、音楽、天文学
- 85) アレクサンダーの将軍の一人
- 86) 背後からの攻撃に備えるため
- 87) フェニキア人でポセイドンの息子と言われる Agenor のこと、ティロスの王であった

- 88) Hiram1世のこと
- 89) 色々に解釈されている
- 90) (注82) 参照
- 91) 後世のカトリックの儀式、ミトラは司教のかぶりもの
- 92) ヘブライ語で神を表す四文字 YHWH
- 93) キリストのエルサレム入城を彷彿させる、新約聖書ヨハネ伝12章、ルカ伝19章
- 94) 旧約聖書ダニエル書8、11:2-3
- 95) エルサレムの北に位置する地域
- 96) リビアとエジプトとの間にあるアモン神の神殿への巡礼
- 97) ここでもずっと後世の中世の Santiago de Compostelaへの巡礼を彷彿させる
- 98) エチオピアは世界の南端と考えられていた

参考図書・辞書

- Libro de Alexandre Real Academia Española Madrid 2014
- Libro de Alexandre Nueva Biblioteca de Erudición y Crítica Editorial Castalia Madrid 2007
- Libro de Alejandro Editorial Castalia Madrid 1985
- Book of Alexander Peter Such and Richard Rabine Oxbow Books Oxford 2009
- Vocabulario de Libro de Alexandre Anejos del Boletín de la Real Academia Española Madrid 1976
- アレクサンドロスの書・アポロニオの書 橋本一郎 大学書林 東京 1991
- Diccionario Medieval Español Martín Alonso Universidad Pontificia de Salamanca 1986
- Diccionario de Castellano Antiguo Manuel Gutiérrez Tuñón Editorial Alfonsipolis 2002
- Tentative Dictionary of Medieval Spanish Lloyd A.Kasten and Florian The Hispanic Seminary of Medieval Studies New York 2001
- Larousse Universal diccionario enciclopédico Librairie Larousse París 1968